水戸堀町・ひたちなか市における地域資源の活用

代表者：工学部機械システム工学科　夛田雄介

連携先

みなと waiwai クラブ　ほか

顧問教員

安江健　農学部教授

参加者

工学部機械システム工学科	夛田　雄介
農学部地域総合農学科	佐藤　紗耶
農学部地域総合農学科	水上　雄介
農学部地域総合農学科	井上　智敦
工学部機械システム工学科	菅原　槇人
工学部機械システム工学科	小林　大樹
工学部マテリアル工学科	渡邊　永
工学部マテリアル工学科	角　俊輔
農学部地域総合農学科	藤嶋　里佳
農学部地域総合農学科	山田　夏菜
人文社会学部法律経済学科	山口二千翔

プロジェクトの概要

●プロジェクトの背景と目的

学生団体ぴたっとひたちなかの活動や，5 学部混合地域 PBL 1 の授業への参加などを通してつながった連携先とともに，ひたちなか市を中心とした大学近辺の地域資源活用に挑む。さまざまな連携先の力をお借りし，学生（よそもん）が地域の人たちと協働して地域を活性化させ，豊かな経験を得るための方法を模索するのが本プロジェクトの概要である。

本プロジェクトを計画するにあたり，「地域の方々と学生がつながり，高めあう場を創り出し，協働して地域の魅力を発信する」という，チーム結成時からの行動指針の達成を念頭に置いた。

本プロジェクトは，地域住民と自分たちだけが満足して終わりではなく，他の学生を活動に巻き込むことで活動の渦を大きくしようとしているのが特徴である。地域で多数の学生が活動することにより，さらに活性化を進める効果が期待でき，魅力を発信しやすくなる。学生は地域との協働を通して豊かな経験を積むことで，学生時代を充実させることができるはずだ。

私たちはこのプロジェクトを通して，学生が地域で活動するためのプラットフォーム的役割を担おうとしている。水戸キャンパス近くの地域で活動する現場を整備し，気軽に参加できるようにすることで，地域に出て活動したいが，手をこまねいている学生を誘い出そうと考えている。

魅力的な地域貢献のやり方を多くの学生と実践し，大学近辺の地域を学生主体で盛り上げていくのが最終目標だ。

●計画の内容

活動の計画は 4 つの分野に分けられる。

〔分野 1〕

スポーツ＆カルチャーしおかぜみなと（旧那珂湊第二高校）の施設利活用のため，「みなとの寺子屋」をはじめとするイベントを開催。また，しおかぜみなとで月一回程度開かれ，施設活用や地域おこしの方針を住民主体で話し合う「フューチャーズミー

ティング」に参加し，学生の客観的なアイディアを提案するとともに，地域住民の考えやニーズをうかがう。

〔分野 2〕

水戸堀町に新設される高齢者福祉施設内の地域交流スペース活用のためのアイディアを学内外の団体と出し合い，それを実施するための計画を立てる。初期は単発のイベントの試行を中心とし，近隣住民のニーズや地域とのつきあい方を探る。

当チームは，寺子屋のノウハウを活用し，放課後や休日に子供の学習を補助するための場所づくりを主催する。そのスタッフとして，気軽な教育体験の場を求める学生を招く計画である。

〔分野 3〕

ひたちなか市子どもの居場所づくりプロジェクトの団体に協力する。定期開催される寺子屋に企画持ち込み参加などをして，サポートする。運営のノウハウなどを学ぶとともに，地域の方とのふれあいから地域の課題やニーズを見つける。

〔分野 4〕

昨年度から続く「ほしいも rename」など，地域の企業や団体と連携した企画やその広報を通して，地域の魅力を外部に発信する。今後は条件が整い次第，商品開発への発展なども考えている。異業種間のコラボや連携のつなぎ役を目指す。

●実行できたプロジェクトの内容

計画のうち，ほとんど実行に移さなかった。分野２が施設完成時期の不透明化と別団体との対話の頓挫により取りやめ。分野３と４は実働メンバー不足のため大部分が取りやめとなった。

実行できたのは分野 1 と，そのほか分野 3 と 4 関連の連携先の視察や手伝いなどとなった。

●学内外連携の内容

今年度は，学生が充実した地域貢献活動をするためのやり方・場所探しが主であるため，他のイベント運営の手伝いや視察なども多数実施する。ノウハウや意見をいただくという連携が多かった。

寺子屋実施に際しては，前回開催時からの質の向上のため，他の教育系サークルや，寺子屋を実施する地域の団体との連携，協力に力を入れた。当日のサポート役・科学実験教室講師として，教育実践系サークルの「千の星」のメンバーにご協力いただいた。

プロジェクトの成果報告

●プロジェクトの成果

〔主催した企画について〕

みなとの寺子屋を，昨年に引き続き無事開催することができた。元 PTA 会長をはじめとした地域の方々・施設関係者の皆様のお力添えにより，これまでの課題を解決し，質を向上させることができた。また，運営メンバーが少なく，スケジュールが遅れがちだったが，地域の方々の助言のおかげで悪影響を抑えることができた。昨年よりも自分たちで行う準備が多く，イベント開催時の手続きの流れ等をよく理解できた。また，連携先・他の学生にご協力いただくことで，少ない人数でも運営できるということを再確認した。

〔他の団体の手伝い，視察について〕

イベント運営の手伝いを通して，新たな関係構築をすることができた。運営する上での工夫や手続きの効率化などのアイディアをいただくことができ，寺子屋を充実させることができた。また，計画が次々と破綻していく局面では，連携先の方々と解決策を議論し，なんとか考えをまとめることができた。

いくつかの現場の体験を通して，地域で活動する意義ややりがいを少しずつ感じる一方，難点も浮き彫りとなった。それらの活動が一般的な学生でも魅力的と思えるかは微妙で，一工夫必要だと結論付けた。

●プロジェクトの反省

計画の段階から，チームの規模に見合わない内容であり，現実をしっかりと判断できていなかった。結果として一つ一つの計画分野を十分達成できず，断片的で主体性に欠ける活動となってしまった。寺子屋や関係調整のほかは，他所が主催するイベント等の手伝いばかりであり，都合の良い労働力のように扱われたと感じるメンバーもいた。その結果，地域に出て活動することの価値がわからなくなり，チームは空中分解してしまった。将来的な連携のためとはいえ，交通費をかけてまでタダ働きをしに行くのなら実情に見合わないと改めて感じた。

実施の過程では，関係者の反応をアンケート等で具体的に抽出することが出来なかったことが反省点である。現場では嬉しい反響に気づいても，それを明確な記録として残すものがなかったのが残念である。また，活動計画に対する助言を柔軟に反映できなかったこと，チーム内の意思疎通が十分でなく，現場の意思で勝手に動いて混乱しがちだったことなども反省点としてあげられる。総じて，得られる知見をうまくデータ化できておらず，チーム内外での共有・活用がなされていなかった。

●今後の課題

真に価値のある地域との連携というものを突き止められなかったため，今後も模索しなければならない。他の学生がこぞって活動に参加するようになるほど，メリットの多い活動を確立しなければ，このプロジェクトの最終目標は達成されない。

この荒唐無稽な計画からなるプロジェクトから得られた反省は多い。最終目標がそう簡単なことではない以上，今後活動を続けるなら，同じ失敗を繰り返さないようにするのが課題である。

●今後の活動について

今後は，一部メンバーが中心となり，学生が地域に出て活動するための魅力的なプランを模索し，他の学生にも勧められるような環境を整備していく。

これまでに恵まれた連携先との関係を保ち，今後興味を持った人たちが自由に活動できる地盤は何としてでも維持していくつもりだ。活動の原点の一つであるPBL1や茨城学の授業などを通して地域での活動に興味を持った学生が，つまらない失敗もせず快調にスタートできるような環境を残したい。また今後，連携先やその関連団体が何か企画し，人員が必要ということがあれば，積極的に発信していきたいと考える。

現状として唯一の恒例企画である「みなとの寺子屋」は，少人数で運営した経験を活

かし，これまでの連携先や学生団体などと協力して，継続して実施する。それも関係者の馴れ合いや運営の自己犠牲で成り立たせるのではなく，協力することでスタッフ全員が満足感を得られるようなシステムづくりをしていきたい。